

すべての原発を廃炉にしよう！」 シリーズ3

『フクシマのうそ』を見よう！

インターネットの動画サイトで2012年3月にドイツ公共放送ZDFテレビが制作した「フクシマのうそ」が見ることができます。そこには驚くことがたくさん出てきます。その一部をここに紹介します。

東電の事故隠し・隠蔽体質は今に始まったことではない

福島第一原発の一号炉は70年代初めにアメリカのジェネラルエレクトリック社が建設し、それ以来アメリカのエンジニアが点検をおこなってきた。そしてZDFテレビの記者は当時のエンジニアであったスガオカ氏にインタビューをする。

(記者) 東電は、点検後、何をあなたに求めたのですか？

(スガオカ) 亀裂を発見した後、彼らが私に言いたかったことは簡単です。つまり、黙れ、ですよ。

何も話すな、黙ってろ、と言うわけです。1989年のことです、蒸気乾燥機（炉心上部に取り付けられている）でビデオ点検をしていて、そこで今までに見たこともないほど大きな亀裂を発見しました。原子炉を点検している同僚の目がみるみる大きくなったと思うと、彼がこう言いました。「蒸気乾燥機の向きが反対に取り付けられているぞ」と。私たちは点検で亀裂を発見しましたが、東電は私たちに「ビデオでその部分を消すよう」注文しました。「報告書も書くな」と言うのです。私が報告書を書けば、180度反対に付けられている蒸気乾燥機のことでも報告するに決まっていると知っていたからです。

(記者) では、嘘の文章を書くように求めたわけですか？

(スガオカ) そうです、彼らは我々に文章の改ざんを要求しました。

スガオカ氏は仕事を失うのを怖れて、10年間黙秘した。GE社に解雇されて初めて彼は沈黙を破り日本の担当官庁に告発した。ところが不思議なことに、告発後何年間も何もおこらなかった。日本の原発監督官庁はそれをもみ消そうとしたのだ。2001年になってやっと、スガオカ氏は「同士」を見つけた。それも日本のフクシマである。

東電・原子カマフィアの報復…辞任に追い込まれた福島県知事

(佐藤前知事) 福島県の原発で働く情報提供者から約20通のファクスが届き、その中にはスガオカ氏の告発も入っていました。経産省は、その内部告発の内容を確かめずにこれら密告者の名を東電に明かしました。それから分かったことは、私も初めは信じられませんでした。東電は、報告書を改ざんしていたというのです。それで私は新聞に記事を書きました。そんなことをしていると、この先必ず大事故が起きると。

それでやっと官僚たちは何もしない訳にはいなくなり、17基の原発が一時停止に追い込まれた。調査委員会は、東電が何十年も前から重大な事故を隠蔽し安全点検報告でデータを改ざんしてきたことを明らかにした。それどころか、フクシマでは30年も臨界事故を隠してきたという。社長・

幹部は辞任に追い込まれ、社員は懲戒を受けたが、皆新しいポストをもらい、誰も起訴されなかった。一番の責任者であった勝又恒久氏は代表取締役役に任命された。

* 1978年福島第一原発3号機で定期検査中に制御棒5本が抜けて臨界事故が発生。1979年には2号機、1980年には5号機で制御棒1本が抜けるトラブルが発生していたが、いずれの事故も公表せず隠していた。また2002年8月には福島第一、第二、柏崎刈羽原発13基で検査データの改ざんなど不正が発覚している。そのなかには炉心隔壁のひび割れも含まれる。

(佐藤前知事) 12月に不正な土地取引の疑いがあるという記事が新聞にのりました。この記事を書いたのは本来は原発政策担当の記者でした。この疑惑は、完全にでっち上げでした。事態はさらに進み、県庁で働く200人の職員に圧力がかけられ始めました。少し私の悪口を言うだけでいいからと。圧力に耐えきれずに自殺をする者さえ出ました。

それで、同僚や友人を守るため、佐藤氏は辞任した。裁判で彼の無罪は確定される。しかし沈黙を破ろうとした「邪魔者」はこうして消された。これが、日本の社会を牛耳る大きなグループの復讐だった。そしてこれこそ、日本で原子カムラと呼ばれるグループである。

都合の悪い情報は首相にも見せない

(菅前首相) 原発は35mの高さに建てられる予定でした。しかし標高10mに建設したのです。低い所の方が冷却に必要な海水をくみ上げやすい。東電がこの方が経済的に効率が高いと書いてます。オフサイトセンターは、本当の非常時になんの機能も果たさなかった。法律では原発事故と地震が同時に起きるということすら想定していなかったのです。

菅直人はこの時、原発で起こりつつある非常事態について、ほとんど情報を得ていなかった。首相である彼は、テレビの報道で初めて、福島第一で爆発があったことを知ることになる。3月15日災害から4日たってもまだ東電と保安院は事故の危険を過小評価し続けていた。

(記者) 原子炉でメルトダウンになったことを、東電はいつ知ったのですか。

(東電・松本) 燃料棒が溶けおそらく圧力容器の底に溜まっている認識に達したのは5月の初めでした。

膨大なデータに身を隠そうとする態度は今日も変わらない。東電はコントロール下にあると言い続けている。しかし「放射能で汚染された冷却水が消えたのは、ホースが雑草で穴だらけになった」ためと説明するなど、その姿勢が疑いたくなるような情報もある。

原発は地震には耐えられない

(島村教授) 原発の設計計算では300~450ガルの地震を想定しています。さらに高確率で発生しないだろう地震として600ガルまでを想定していますが、この大きさに耐えられる設計は原子炉の格納容器だけで原発の他の構造はそれだけの耐震設計がされていないのです。私たちの調査では最近の地震の加速度がなんと4000ガルまで達したことがわかっています。想定されているよりずっと高いのです。

(記者) 電気会社は、それを知って増強しなかったのですか？

(島村教授) 今のところ何もしていません。これだけの地震にたえられるだけの設計をしようなどというのは、ほとんど不可能でしょう。

(記者) 半壊状態の福島原発で地震が来ても全壊することはないと何故確信がもてるのですか？

(東電・白井) 4000ガルという計算は別の調査では…私は何とも言いかねます。

(記者) 原発を日本で稼働させるだけの心構えが、東電にできているとお考えですか？

(東電・白井) それは答えるのが難しいですね。

* 分会では「フクシマのうそ」DVDを貸し出しています。希望される方は役員に声をかけてください。